

亦作痢、惡疾也、

〔撮壤集〕痢疾、荒痢、黃痢

〔倭訓栞〕中編六、くそひりのやまひ 赤痢をちくそ、白痢をなめ、重下をえりおもとよむ、後重也、

〔類聚名物考〕痢病二、痢病

此病名につきて故よし有る事なり、内經にては腸辟といひしを、仲景は下痢といへり、是今の痢病にて有るべしといへども、符合せざる所あり、玄からはその比まではあまり多からぬ病と見ゆ、漢の末比より世に多く有るやらん、療治藥方もさまざま、あれども、寄がたき所あり、本朝には此病多く有りしやらん、却てよく療治も仕覚えしとえられたり、道三の製せし九味和中湯其驗あり、または丹水翁の逆挽湯もよし、

〔時還讀我書〕下、梅雪勢氏伊又話ス、暑月ノ暴痢ヲ薩州ニテシヤリト稱ス、慶長中、明人郭安國トイフ

醫歸化セシコトアリ、シヤリノ名ハ安國ノイヒ出セシナリ、痧痢ニテアルベシ、安國ハ良工ニテ

治驗モ存セリ、其子孫今ニ仕官セリトゾ、

〔永正記上〕一赤痢病者

法家説者、月水可爲同前之由、雖令勸答、神宮之法、血氣止、中二日之後可參宮也、地體忌同宿同火者也、

〔醫心方十一〕治赤利方第廿二

病源論云、腸胃虛弱、爲風邪所傷、則挾熱乘於血、血流滲入腹與利相雜下、故爲赤利、○中略

治重下方第卅一

葛氏方云、重下、此謂今赤白瘧下也、今下部疼重、故名重下、去膿血如鷄子白、日夜數十行、

〔病名彙解二〕痢病 俗ニ云シ。プロ。ハラ。ナリ、丹溪ノ曰、痢赤キハ血ニ屬ス、小腸ヨリ來ル、白キハ氣